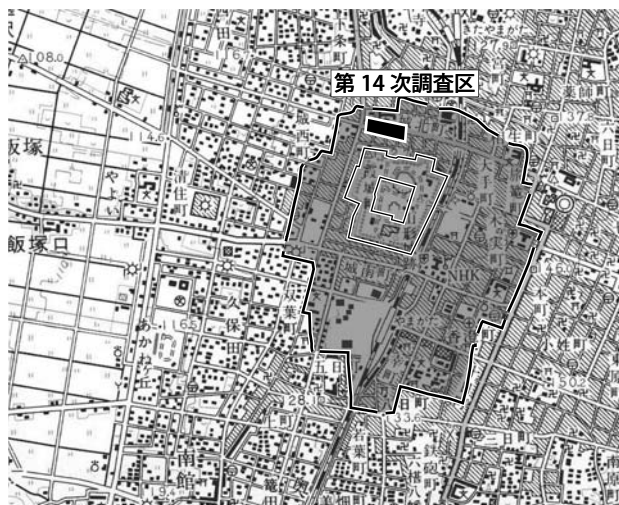


やまがたじょうさんのまる
山形城三の丸跡（第14次）

遺跡番号	201-003
調査回数	第14次
所在地	山形県山形市城北町・旅籠町
北緯・東経	38度15分35秒・140度19分35秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業	一般国道112号霞城改良事業
調査面積	4,500㎡
受託期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
現地調査	平成26年5月20日～11月28日
調査担当者	小林圭一（現場責任者）・川崎康永・小笠原伊之・高木茜
調査協力	山形市上下水道部・山形市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別	集落跡・城館跡
時代	奈良時代・平安時代・中世・近世
遺構	溝跡・土坑・柱穴・井戸跡・河川跡
遺物	土師器・須恵器・陶磁器・金属器・瓦・銭貨（文化財認定箱数：52箱）



遺跡位置図（1：50,000）

調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城（本丸・二の丸）を取り囲む東西約1.6km、南北約2kmの広大な城館跡で、文禄・慶長年間（1592～1615年）に最上氏第11代当主の最上義光が、三重の堀を構えた城郭として整備したと言われている。国内では5番目の広さで、奥羽地方では最大の城であった。しかし最上氏は元和8年（1622年）に第13代義俊が改易され、それ以降鳥居氏から水野氏まで藩主が転封・入部を繰り返した。石高も57万石から5万石まで削減され、広大な山形城を

維持することが困難となり、手入れが行き届かず、幕末期の水野氏5万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたと言われている。

今回の発掘調査は、国道112号の拡幅工事に起因し、平成23年度の第9次調査、24年度の第11次調査、25年度の第13次調査に続いて実施されたものであり、国道112号に沿った区域を、市街地の区画毎に7箇所調査区（B・I～L・N・O区）に分けて調査を実施した。

遺構と遺物

今回の調査では、奈良・平安時代から近世・近代まで、各時代の遺構や遺物が検出され、人々がこの地に長い期間にわたって暮らしてきた様子が判明した。

遺構が最も多く検出されたのは、K区とした調査区で、近世の井戸跡と思われる石組み施設が検出された。また西隣のL区とした調査区では、石を組んだ施設内（長径240cm）に瓦が大量に投げ込まれていた。瓦の総数は390点を数えたが、その中には最上義光が山形城を大規模改修した頃（16世紀末～17世紀初頭）の様式の軒丸瓦、軒平瓦が含まれていた。その他の瓦も大部分が江戸時代中頃までの様式で、三の丸北西端に当たる地域

の武家屋敷が取り壊され、必要なくなった瓦が捨てられたものと考えられる。

遺物としては、16世紀末～17世紀初め頃に佐賀県の唐津で焼かれた陶器等が出土した。中には完全な形のものも含まれており、最上氏の時代に関係した遺物と考えられる。また金箔を張った痕跡を残す瓦の破片も出土しており、最上氏時代の栄華をうかがわせている。

まとめ

江戸時代には武家屋敷となっていた三の丸一帯は、古

代から既にある程度の規模の集落が存在しており、そうした集落を基盤にして城下町が形成され、近代の山形市街地の発展につながったと考えられる。今回調査した三の丸の北西側は、最上氏時代の16世紀末～17世紀の遺物がこれまでの調査より多く出土したことから、この地域が比較的古い時期に田畑となったため、後世の開発があまり進まなかったと考えられる。三の丸の範囲内でも、場所により後世の土地利用に差異があったことを示すものであろう。

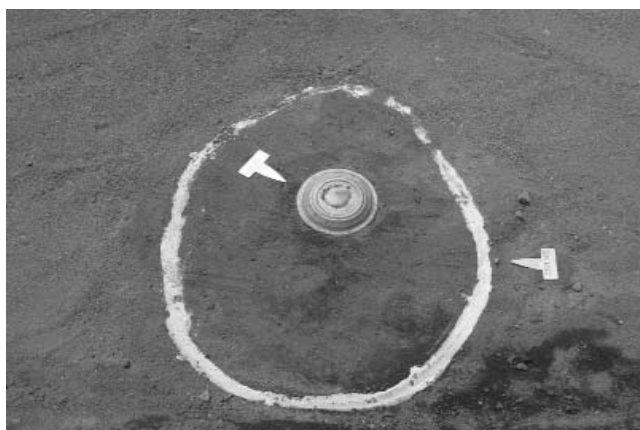


写真1 J-1区 SK1551 遺物出土状況

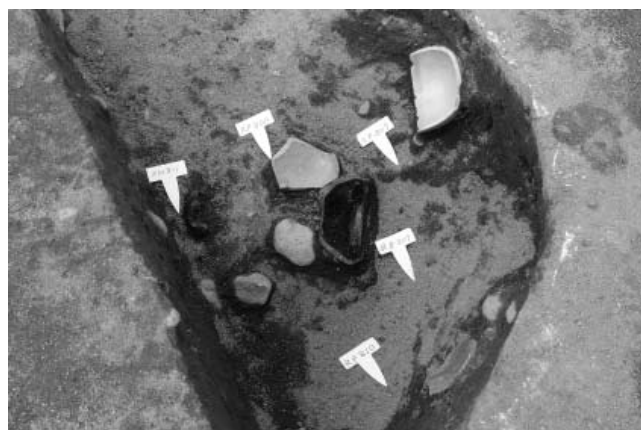


写真2 J-1区 SK1531 遺物出土状況



写真3 K-2区 SK1669 調査状況



写真4 L-1区 SK1697 瓦出土状況



写真5 L-1区 SK1697 出土瓦



写真6 L-1区 SK1697 瓦出土状況



図1 調査区概要図 (S=1:200)

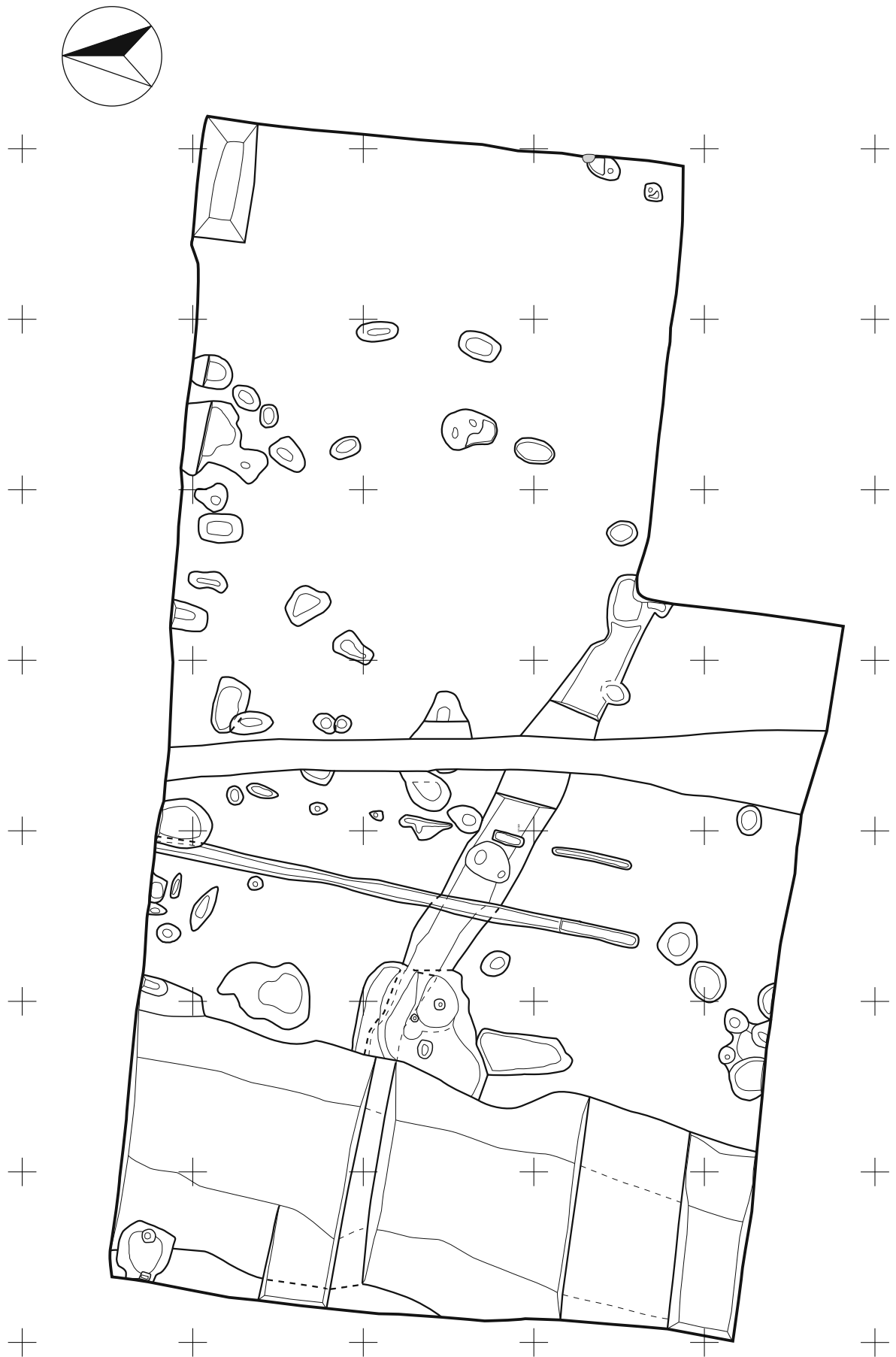


図2 J-1区遺構配置図 (S=1:100)